

# この子供たち

(8)

イーディス・ウォートン作  
松原至大訳

## 父母の手を逃がれて

「あの子に、やうべ手紙を書きましたよ。」ボインは、翌日セラーズに、こう言った。自分が手紙を出すのに、こうして言いわけをしなければならないのかと思うと、やりきれなかつた。だが、セラーズは、次ぎのように答えて、ボインを安心させた。

「まあ、うれしくうございますわ。私たち二人が、ここにこうして、幸福に暮しておりますので、あなたの小さなお友だち

が、のけものにされるのかと思いますと、私、いやでございました。」

これは寛大な心だなど、ボインは思つて、セラーズが好ましかつた。その度、ボインは、山をおりて、いつしょに食事に行かないかと誘つた。それも、ボインの地味なホテルではなくて、山荘の下の松林の中にある「バレス」へであつた。大きなレストランのはなやかさが、山荘での生活と対照されて、セラーズを喜ばせるであろうと思つたからである。

二人は食事を終えて、広いホールの一隅でコーヒーを飲んでいた。ボインは、ここに来てから、初めてセラーズを同じような美しいレディーたちの間でながめたのである。そしてかの女のように気品を持った婦人が、ほかにいないのをうれしく思つた。給仕頭に言いつけた上等のシガレットの香につままれながら、セラーズが語る觀察と批評とを、楽しそうに聞いていた。

「あの柱のそばにいる娘さん、かわい、じやありませんか。でも、『ヴォーグ』や『トライ』で、よく見る顔ですわね。」

マーティンさん、美人も標準に合わされてしまつたら、つまりませんわねえ。」

ボインも、もう今日では、あり方が、そくなつてゐるのだと思つてゐた。そしてセラーズの持つてゐる最も大きな魅力は、かの女が、まだ婦人といつものが、個性の美しさを持つていた過去の時代に属してゐるからであると、ひそかに思つてゐた。

「もしほくが、ああいう新しい型の美人を女房にしたら、人ごみの中では、いつだつて見わけがつかないでしょう。」ボイン

はこういつて、贅意を表した。セラーズは、満足そんに笑つた。それから眼鏡をあげて、ホールを見廻してから、

「あの方なら、あなたは……」

「また新しい美人ですか。どれ——」

「美人、いいえ、きれいな方ではありませんが……でも、ちがつたところがあります。今入つてきただばかりの娘さん。あら、どこへ行つてしまつたのかしら。ああ、ボーターとお話をしています。ああ、こゝちを見て……でも、あなたのところからは、見えません。まだ子供／＼していりますよ。ああ、よい顔。」

ボインには、最後の言葉が、ほとんど聞きとれなかつた。そこへ、ボーターがきた。

「若い御婦人が、あなたさまにお目にかかりたいと、おひしゃつてでござります。」

ボインは、人ちがいではないかと思つて、指さされた方を見た。そこに立つてゐるのは、ジュディス・ホキータであった。

地味な旅行服を着て、やせて細そりと、心配そうな目の上に、帽子を深くかぶつていた。いかにも小がらで、くすんだ色の装いをしていて、腕をあらわに出した派手な婦人たちの中では、全く目につかなかつた。だが、セラーズは、直ぐに目につけたのである。いかにもなにか、ほかの婦人の持つていないものが、ジュディスにはあつた。ちょうど、セラーズが持つてたと同じように、けれど今は、そんなことを考へてゐる時間がなかつた。一体この子は、どこから来たのか。だれに連れられてきたのであろうか。

「ちょっと待つて下さい。ぼくの知つてゐる娘です。」ボインは、ボーターについて、階段口のかげのところに行つた。

「やあ、どうして？」

「あら、マーティンさん。私、お立ちになつた後かと思つて、心配いたしました」

ボインは、両手でジュディスをおさえた。ジュディスは、小さな顔をあげた。そうだ。どうしていけないのか。ボインは、ヴェニスで別れる時にキスをしたことがあった。ボインは、ジュディスの頬に、唇をつけた。

「どうしてきました。皆、御ひつしょ」

「マーティンさん。こういつて、ジュディスは、しつかりとボインにすがつた。ふるえているのが、わかつた。ジュディスは、ボインの問いに答えようともしないで、あたりを見た。

「どいかにライティング・ルームはございません。お食事の後では、そこがあいておりましょう」

ボインは、ホールの向うの小ぎれいな部屋へ、ジュディスを連れて行つた。そこはジュディスが言つたように、机も、長椅もあつていた。二人はならんで、腰をおろした。

「ああ、マーティンさん、あなたにもうれしいと、おっしゃつて頂きとうござります」

「うれしいって。もちろん、ぼくはうれしい」こういつて、ボインは自分の心を押ししづめた。

「あなたは、疲れていますね。なにか、変つたことでもあつたのですか。お家の方も、ここにきたのですか」

ジュディスは、ちょっと身体をひいて、まじめな顔になつた。

「父と母のことでしたら、まだヴェニスにおります。私たちが、ここにいることは知りません。マーティンさん、しからな

いで下さい。私たち、逃げてきましたの」 「逃げてきた。だれが逃げてきたんです」

「私たち、みんな。スコープとナニーといつしょに、私たち、いつかしら逃げ出さなければならぬと、いつも言つていました。スコープと、私とで相談しました。私たちは、丘の下の下宿屋『ローゼングリュ』にいます。父も母も、私たちがここにいるとは、夢にも思いません。きのうヴェニスに着いたクナーダ号で、アメリカへ行つたものと思つてします。私は、そのように手紙に書いてきました。テリーは、すばらしい智恵者です。みんなテリーが、考え出しました。私たちは、ベデュアで自動車をやつて、ここへきました。でも、心配なことには、あの子が、すつかり弱っています。空気がいいから、じき

によくなりましょうねえ。』

ジュディスは、一生懸命に、それでいてもの静かに、初めから終りまでを物語った。あたかも、かの女が語ることは、一つとして別に驚くべきこと、重大なことではないかのように、たつた一つ、テリーの健康のことについては、例外であった。

『マーティンさん、ここは空氣は、よろしいのでしょうかね』と、歎願するように言ったので、ボインも、

『こんなよじところは、ほかにありませんよ』と答えるべく答えた。

それを聞いて、ジュディスは、いくらか落ちついた。

『ああ、来てよかったです』こう言って息をついた。ボインには、かの女が、疲れきった子供のように思われて、今にも自分の肩によりかかるて、眠ってしまいやしないかと思つた。

『ジュディスさん、もう十時を過ぎていますよ。なにか食べましたかな』

『頂きません。時間がなかったのです。なによりも、子供たちを落ちつかせなければならなかつたし、それに、あなたが、ここにいらっしゃるか、どうかも確かめなければなりませんでしたから』

『お話をする前に、なにか、君は食べなければいけない』

『ええ。頂きます』こういつて、ジュディスは、いつものしつかりした態度にかえつた。

『ここで待つていらっしゃい。ぼくが、なにか探してくる』ボインは、ホールの中にはいった。そこでは人々が諸所に一団となつて、ランプを始めていた。ボインは、セラーズを、空になつたコーヒーのカップといつしょに、残して来たことに気がついた。だが、どこにも、セラーズの姿はなかつた。

『ああ、そうか、待ちくたびれて帰つてしまつたのだ』ボインは、いらだたしく思つた。待つていてくれた方が邪気もなく親しみを感じるのに、かの女は姿をかくした方が、よいと思つたのにもがいない。ボインにとって今大切なことは、ジュディスに食べるものを与え下宿屋へ届けることだけであつた。それをすませてから、山荘へかけつけて訳を話せばよいと思つた。給仕を見つけて聞くと、もうおそいので、食事の用意はできなかつた。ハムのサンドウイッチとカクテルを、ライティング・

ルームに持つてくるようにいつけた。カクテルを一口飲むと、ジュディスの血色は、平常の通りになつた。自分の分まで、ボインは、ジュディスにやつた。

「ああ、これで、みんな、ここに来てしまいました」

「ジュディスは、ほっとして満足そうに言つた。

「チップは」と、ボインは心配になつた。

「チップのこと、そうおっしゃると思つていきました。私がチップを連れずに少しでもよそへ行けるとお思いになりますの」

「だが、一体、これはどうした訳なんです。あなた方、氣でも狂つたのかな」

「気が狂つたのは、父と母です。私は、そんなことでもあれば、逃げだしますって、前からいっていました」

「どんなことが、おこつたのです」

「あら、私、おしらせたと思ひます。でも、手紙が届かなかつたのでしょうか。届いていれば、お返事を下さいますわねえ」と、ジュディスは信頼の面持ちで、ボインを見た。ボインはまづついて、どもつた。

「さあ、聞かせて下さる」

「なにもかも、こわれてしましました。私には、前からわかつていました。またこの前のような騒ぎが始まつたのです——

探偵だの、弁護士だの、母の離別金だのといふ騒ぎが。マーティンさんは、御存じだらうまいしょう。子供たちがよくいう母の古い友だちのサリー・マニーという人のことを、子供たちは、物心がつくとから母に聞かされていて、なにかいけないことがおこると、母はその人を呼ぶものと、子供たちは思つています」

「で、こじれてしまったのですか」

「今までに、こんなひどいことはありませんでした。父は前から、私たちを分けていました。バンとビーチーはボンデルモントへ。あの人は、お金持ちのアメリカ女と結婚しましたから。それからジニアは、シニーをひきとることになつています。レンチさんは、あの子が、お気に召してゐるのです。父は、もちろんチップを引きとり、大きい私たち三人は、いつものようであつちへやられたり、こっちへやられたりすることになりそうです。ちょうどスコープが、ビアリッツの貸出図書館からいつ

も借りてくるばろ／＼の本のようだ。つまらない本は、いつまでも借りておけますけれど、面白いのは、一週間しか借りておけません。だから、私、みんなを連れて、逃げ出さないわけには参りません」と燃えるような顔を、ボインの方へ向けてた。

熱もあるのではなかろうかと、ボインは心配になつた。かの女の手をとつたが、顔のように熱かった。

「あなたは疲れきっている。あとは明日のことにしてしましよう。さあ、帽子をかぶって。下宿まで送りましょう」

「でも、マーティンさん。お約束して下さいね。私たちをいつまでも守つて下さるって」

「安心なさい。スコープの本にかけて誓いますよ。さあ、でかけましょう。でないと、あなたは寝こんでしまう」

今までに、こんな眠むそなじュディスを見たことはなかつた。おとなしく帽子をかぶせてもらい。コートを着せてもらつて、トランプをしている人たちの間を通つて、夜の大気の中に出た。月が、西の高い峰に、すれ／＼になつてた。二人が、青白い原と、眠つた人家との間の道を歩いて行くと、谷の下の家から、十一時四十五分をしらせる時計の音がした。林はずれには、まだ灯が、二つ三つまたいていた。しかし白い柵の奥に、しかつめらしく引っこんでいる「ローゼンクリュー」は月光に照らされて、戸がしまつてた。ボインは、庭口の戸を開けると、ジュディスの前に立つて、階段をあがつて行つた。

「ああ、ベルはならなくなとも、よろしいのです。みんな起きてしましますから。鍵はかかっていないと思います。私、スコープにいゝときましたから」ジュディスは、扉のハンドルをまわした。扉は、しづかに開いた。ジュディスは向きなおつてボインの身体に腕をまわした。

「私、あなたが守つて下さらなかつたら、どうしてこうやっておられましよう」ジュディスはこう言つて、力いっぱいに、キスをしようとした。

「それはいけない」ボインがつぶやいた。そしてやさしく、ジュディスの腕をほどいた。二杯目のカクテルは、飲ませない方がよかつたと思ひながら。そして

「早くおはいりなさい。あしたの朝、みんなの様子を見に来ますよ」といつて、扉をしめた。

もう真夜中であつた。今頃、あの山荘を訪ねたら、セラーズは、なんというであろう。ホテルへ帰る途中、左へ折れて、な

れた近路を登って行つた。だが、山莊には、もう灯がついていなかつた。

あくる朝、ボインは、セラーズのところへ行く前に、「ローゼングリュー」へ行つた。ホキータ家の人たちの、奇怪な家について、もっとくわしいことが知りたかったのである。

門のところで、スコープに出会つた。いつもに増して、やせてはいたが、かたい決心が見えていた。灰色の木綿の手袋で、ボインの手を強く握つて、あなたのいる間に、ここに来られたのは、天の助けであるといった。ジュディスとテリーは、とても疲れているので、失礼をして、そつとしておく方が、よろしくございましょうねと聞いた。ほかの子供たちは、朝の食事を終えて、ナニーと子守に付き添われて、谷の上の草原へ遊びに行つたといつた。

ボインが聞こうと思つたニュースの重苦しいのにひきかえ、スコープの言葉は軽らかであった。スコープは、落ち着いていた。いつでも危急の場合に出会うと、そうであつた。これまでに、あまりにも多くの危機に出会つてきたので、かの女にはそれが、雷雨か、水痘のように、自然的な、また避けがたいもののように思われていたのである。困つたことではあるが、騒いだところで、どうにもならないことであった。それでも決して、事件を軽じてはいなかつた。これまでに度々、ジュディスが子供を連れて家出をすると、おどかしたことがあつたが、

「今度という今度は、物の見事に、それを実行いたしました」スコープは、勝ちほこつたように、いかめしくこう言った。

だが、実行はしたが、どう解決をつけるのか。これは、ボインが発せすにはおられなかつた疑問である。あまりにも、かれらの出発が急であったから、そうしたことにして、気がつかなかつたことは、スコープも認めなければならなかつた。でも、あの時に実行しなければ、二度と機会はなかつた。

「マーティンさん、だれだつて、二度もあのように日に会つて御らんないまし。私どものお子たちのように」。

細かな話を聞けば聞くほど、さぞやひどかにちがいなど、ボインは思った。そしてもうジュディスには、くりかえして聞くまいと思った。だが、反抗の第一歩を踏み出した今となつて、スコープも、自分たちでやり通せると思っているのであらうか。もし見つけられたら、かれ等はどうする覚悟でいるのか。

(つづく)